鷹放つ

能村　研三

あしうらの土やはらかき無月かな

一茎ももつれず咲けり曼珠沙華

駿州の負将の歌碑や虫しぐれ

鰭あらば鰭を立てたし霧の夜

天地の息とともにひて鷹放つ

鷹匠は野にあるひかり集めけり

採りたてはうすくれなゐの新生姜

千々にくだく北斎の波鳥渡る

初鵙の一声に心鞭打たれ

一人づつ訣れてひとり後の月

鎮守の森

七月に我が家の家の改築工事のために次女夫婦のマンションに仮移転してから四か月が経った。本宅からは距離にして一キロにも満たないところなのだが、駅に行くバス停もすぐそばにあり、ちょっとした買い物が出来る商店街もあり、本宅の周辺よりもはるかに便利なところである。何よりもうれしいのは、ポストがマンションに近い所にあることで、郵便物を頻繁に出すものにとっては有難い。

またマンションの六階からの見晴らしもよく、市川にある二棟の超高層ビルやスカイツリー、天気が良い日には富士山も見えることがある。先日は日が沈む頃ダイヤモンド富士らしきものも見えた。

移転したばかりの八月には江戸川の花火をしっかり見ることが出来た。

マンションから五分もかからない距離に小高い丘があり、ここには白幡神社を囲む鎮守の森がある。朝六時半になると一年中毎日ラジオ体操が行われている。少し早起きが出来た日は体操に行くことにしている。体操が始まる前には、近くの氏子の皆さんが熊手と箒をもって銀杏落葉を掃き清めてくれている。皆ボランティアの人たちばかりだが、その動きを見ていても気持がよい。行き合う人はお互いに朝の挨拶をかわし、からりとした人の交わりが爽やかである。

体操が終わった後、本殿に参拝し鬱蒼とした神社の階段をおりて帰宅するのだが、一軒の農家の家で炊きたてのお赤飯が販売されている。何の店構えもなく、納屋の奥にいる主に声をかけて頒けてもらっている。近くの道の駅にも出しているそうだが、農家での直接販売は朝六時から八時までで、何回か買っているので主とは親しくなった。

本宅とは近い距離にありながらも昔からの「村」の鎮守の森を守り抜こうとしている地元の人たちの心意気を感じた。

年が明けたら本宅に戻ることになるが、市川にも素朴な人の交わりがあることを知ってうれしかった。

能村　研三